

FIWC KYUSHU
NEPAL CAMP
IN SUMMER
2018



Yu Rocky Shunsuke Yuya

Airi Maki Kasumi Hinata

Yuka Eriko Mai Yudai

With our Family

in Nepal Sindpalchok

Ghumang Maneswara



目次

1.	はじめに	P.3
2.	スケジュール	p.4
3.	事後アセスメント&事後報告	P.6
4.	ワーク詳細	P.8
5.	その他の活動（プロジェクト）	P.12
6.	イベント報告	P.21
7.	各係からの報告	P.23
8.	ネパールでの生活	P.26
9.	その他の活動（JICA・UN Habitat 訪問）	P.27

1.はじめに

ネパールで地震が発生して3年。

復興と呼べるまではまだまだ先は長いようだ。

未だ村には、ビニールを壁がわりにした家もいくつか存在する。

鉄筋コンクリートの家は村にいくつかしか存在せず、

建設の途中で中断しているものも多くある。

今回我々が協力する“グンバ”は、村唯一の公共施設である。

“グンバ”は、日本で言うところの公民館の役割と、

お寺の役割の両方を持つ。

人と人とのつながりや、村の人たちの信仰にとって、

最も重要な建物の一つであることは間違いない。

その“グンバ”も3年前のネパール大震災で倒壊した。

村の人たちは、再建に向けてそれぞれ資金を出し合ったが、

目標額に及ばず、建設の途中で中断している。

“グンバ”が存在したときの記憶がある村の人々は、

その重要性から再建への思いを強く願っている。

我々は、その強い思いに惹かれ、今回も同じ村での活動を決めた。

2. スケジュール

キャンプ前スケジュール

- 2018.5.9 合同説明会@びおとーふ
- 2018.5.16 ネパールキャンプ説明会@西南クロスプラザ
- 2018.5.25 キャンパー締め切り
- 2018.5.30 第0回ミーティング@西南図書館 第5会議室
- 2018.6.12 第1回ミーティング@びおとーふ
- 2018.6.27 第2回ミーティング@びおとーふ
- 2018.7.2 第3回ミーティング@びおとーふ
- 2018.7.4 第4回ミーティング@びおとーふ
- 2018.7.10 第5回ミーティング@びおとーふ
- 2018.7.12 熱研安全セミナー@九大病院キャンパス
- 2018.7.17 第6回ミーティング@びおとーふ
- 2018.7.24 第7回ミーティング@びおとーふ
- 2018.7.27 第8回ミーティング@西南クロスプラザ
- 2018.8.6 最終ミーティング @びおとーふ

キャンプスケジュール

8/9	福岡空港発 (福岡—北京)
8/10	カトマンズ着 (北京—昆明—カトマンズ)
8/11	ハビタット訪問 銀杏旅館宿泊
8/12	村に到着
8/13	事後アセスメント (現地調査)
8/14	事後アセスメント (現地調査)
8/15	村人との MTG (GAM)
8/16	ニーズ調査・生活状況調査
8/17	ニーズ調査・生活状況調査
8/18	ニーズ調査・生活状況調査
8/19	ワーク・プロジェクト MTG
8/20	VISIT
8/21	VISIT
8/22	エンジニアさんと MTG
8/23	VISIT

8/24	イベント準備
8/25	イベント
8/26	イベント片付け、プロジェクト・ワーク MTG
8/27	VISIT
8/28	村発、ラムチェ村訪問
8/29	京都外大の学生団体の皆さんと交流
8/30	移動(ラムチェ村→カトマンズ)
8/31	JICA 訪問
9/1	観光
9/2	カトマンズ発 (カトマンズ-昆明)
9/3	福岡空港着 (昆明-上海-福岡)

※『VISIT』とは村内の家々を訪問し、人々と交流することである。

※びおとーぷは、FIWC 九州委員会が加入している NPO・NGO 共同事務所である。

3. 事後アセスメント&事後報告

●事後アセスメント

前回行ったワークを含めた活動が村人にどのような影響をもたらしているのかを調査するため2018年春の活動の事後アセスメントをアンケート方式で実施した。



<2018年春ワーク概要>

場所：Maneswara 8, Ghumang, Sindhupalchok, Nepal

内容：コミュニティハウス建設(屋根)

期間：2/28(水)～3/29(木)

参加者：現地人コーディネーター、ワーク地の村人、FIWC九州

<アセスメントの結果>

グマンマニサワラ村の18世帯(性別問わず)に5つの質問を5件法で行ってもらい2つの自由記述の質問を行った。

前回の活動について

- | | |
|----------------------------|--------|
| 1. 私たちの滞在はどうでしたか？ | 平均 4.7 |
| 2. 活動によって村の生活は向上しましたか？ | 平均 4.6 |
| 3. 村人がプロジェクトに参加しましたか？ | 平均 4.1 |
| 4. プロジェクトに参加した村人は楽しかったですか？ | 平均 4.4 |
| 5. 再びFIWCがこの村に滞在してよいか？ | 平均 4.7 |

自由記述

- あなたの現在の生活で今一番困っているものは何ですか
A、家のこと、村に行くまでの道路、病院
- あなたは以前村のために仕事をしたことがあるか？
A、水道タンク、道路、道路補修等、コミュニティハウス

～事後アセスメントの統括～

今回の事後アセスメントによって、現在コミュニティハウスはあまり使用されていないことが分かった。理由としては、現在のコミュニティハウスは屋根だけしか完成しておらず本来の目的である冠婚葬祭などに使用するには建物としての機能が不十分なためである。そして GAM とニーズ調査の結果からどちらもコミュニティハウスの完成を望んでいた。そのため今回は新たにワークを探すのではなく引き続きコミュニティハウスプロジェクトを行い、少しでも早い完成を目指す。

また、我々がこの村で滞在することに対してはよい評価が得られた。

<現在のコミュニティハウスの状況>



● 事後報告

- ・前プロジェクトである屋根の完成がギリギリになったため屋根を支えるサポートの除去の撤去をコーディネーターに任せてしまった。このサポートは様々なところから借りたためコーディネーターだけが返却する負担が大きかった。
- ・コミュニティハウスの支柱や屋根の劣化が目立った。

4. ワーク詳細

● ワークリーダーのあいさつ

今年度ワークリーダーを務めることになりました西南学院大学 2 年の洲崎裕也です。春に参加してくれる皆さんがこのキャンプに参加してよかったと思えるようなワークにしていこうと思うのでよろしくをお願いします！

● 今年度のワーク地決定に至るまでの流れ

初めに 2019 年度ネパールキャンプを行うにあたり、前回の春に活動を行ったグマンマニサワラ村で活動するのか、別の村に活動場所を移動するのかを検討した。また、同じ村での活動となる場合、ワーク内容を変更すべきかを話し合った。

● キャンプ地を選択する際のメリットとデメリット

➤ 前回行ったグマンマニサワラ村

メリット

- ・引き続き同じ村に訪れることによりキャンパーと村人の信頼関係が築ける。
- ・前回受けた村人たちのニーズに応えることができる。

デメリット

- ・同じ村で活動するためほかの村の情報を得られない。
- ・村を平等に扱えなくなる。

➤ 別の村で活動を行う

メリット

- ・ほかの村に行くことによっていろんな情報が得られる。
- ・いろんな村を平等な立場で扱える。

デメリット

- ・前回の村に滞在する日程が短くなるため関係づくりに影響する。
- ・ネパールは下見期間中が雨季であるため、ほかの村を回る場合、安全面のリスクが生じる。

以上のメリットとデメリットが出たが、前回と同じ村で活動することで得られる「キャンパーと村人」間の信頼関係の構築が最大のメリットであると考えた。そのため、今年度のキャンプも前回の春に活動を行ったグマンマニサワラ村で活動を行うことが決定した。

- ワーク決定に至るまでの流れ

今回プロジェクトを決定するにあたり GAM とニーズ調査の二つを行った。

- GAM(村の人たちと FIWC による MTG)

この GAM によって、我々 FIWC が今年も村を使用させてもらうという挨拶と村の人たちが我々に何を協力してほしいのか、そして村にとってこのコミュニティハウスがどのような役割を成しているのか、この村にコミュニティハウス建設以外のニーズは存在するのかを把握するために GAM を行った。

- 今回の GAM で分かったこと

- ・村の人たちは建物として機能するレベルのコミュニティハウスの完成を望んでいる。
- ・村からも予算を出したいが個人の生活費を賄うので精一杯なため現状不可能。
- ・コミュニティハウスの完成により、冠婚葬祭の場や緊急時の避難場所等の活用が見込まれる。



- ニーズ調査

GAM では引き続きコミュニティハウス建設の要望が出たが、村人おのおのがどのようなものをニーズとしているかを知るため調査を行った。ワーク内容は GAM とニーズ調査の結果をもとにキャンパー内で決定することにした。

ニーズ調査の結果、多くの村人がコミュニティハウスの完成を望んでいることからコミュニティハウスの建設を引き続き行うこととした。



- ワークを決定する際の注意点
 - ・ワークが公共性を重視したものであること
 - ・村人のニーズが一致していること

- ワーク内容

～概要～

場所： Maneswara 8, Ghumang, Sindhupalchok, Nepal

内容：コミュニティハウスの建設(階段と壁の建設)

期間：2月の下旬～3月下旬の3,4週間程度

参加者：現地人コーディネーター、ワーク地の村人、FIWC九州

2019年度春キャンプ コミュニティハウスプロジェクト	
ワーク地	Maneswara 8, Ghumang, Sindhupalchok, Nepal
ワーク詳細	コミュニティハウスの壁と階段の建設と利便性向上のための周辺整備
工期予定日	18日間予定 2月の下旬～3月中旬の3週間程度
ワークを行う目的	村人と共同でワークを行うこと。 協力して建設することにより村人間の交流を深めること。
ワーク予算	最終完成までの予算：85万円 今ワーク予算：50万円 階段における費用：20万円 壁における費用：30万円
予算の集め方	クラウドファンディング、キャンパーによる拠出金
ワーク参加者	FIWC キャンパー、現地コーディネーター、現地の村人


● 今回のワークの計画


1. 階段を作ろう！

初めに階段を作ります。予定では赤い部分に階段を作っていきます。写真にある四角い穴から飛び出している針金を用い、レンガとセメントで階段を製作していきます。

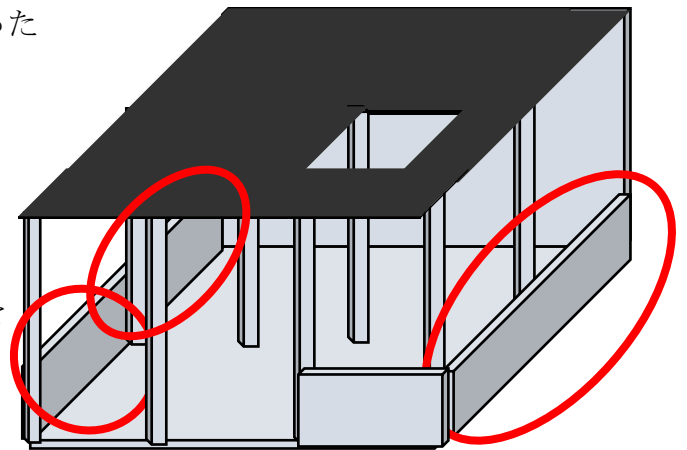


2. 壁を作っていこう！

 この色は村人が自分たちで作った部分です。

 この色は前回のキャンプで作った屋根になります。

今回は2箇所の楕円形の部分のレンガを削り取り、丸い部分に削り取ったレンガを結合していきます。



現段階では壁を2面建てる予定です。

壁には窓も取り付ける予定なので、ネパールに向かう前に現地コーディネーターに資材の取り寄せをお願いします。

3. 周辺を整備しよう！

このようにコミュニティハウスの周辺の道が非常に狭かったり、道路がいびつだったため整備していきます。

方法としては、右の写真のように土山があるのでそれをスコップ等で削り取る予定です。この作業は階段を作っている時に平行して行います。



5. その他の活動（プロジェクト）

● プロジェクトを開始した背景

前回の春のネパールキャンプからグンバの建設に関わり始めた。当初、村の人々はグンバ建設のために、自分たちの生活費からお金を出し合いグンバの基礎と柱、壁1枚を造っていた。しかし、集めた資金も尽き、グンバの建設は中断された状態であった。そのような状況で、私たち FIWC 九州ネパールキャンプはグンバを一緒に建設することになった。ネパールキャンプでは、助成金やクラウドファンディングを用いてグンバ建設のワーク資金を集めたが、建設に必要な費用を集めるのは容易ではない。また、村の人々が望んだグンバ再建であるため、村の人々自身にもグンバの建設を一緒にやってもらうだけではなく、資金の調達も共に行なっていきたくて考えるようになった。JICA のネパールオフィスを訪問した際も、震災後、インフラをはじめとしたハード面の支援が中心で行われているが、今後、生計を立てるためのノウハウを身につけるといったソフト面の支援も必要になるという話を聞いた。ネパールでキャンプを続ける中で、私たち FIWC 九州でもソフト面の支援ができるのか模索する時期なのではないかと考え、ワークに付随する形でプロジェクトと称し取り組むことにした。

● 今回のプロジェクトの活動

～生活状況調査～

今回私たちは生活状況の調査をするためグマンマニサワラ村の全家庭を対象にアンケートを行った。アンケートには英語とネパール語で質問項目を書いた質問用紙を用い、口頭にて質問項目を読み上げ回答してもらった。なおアンケートは各世帯に行った。今回調査を行った項目は以下の通りである。

- ① 土地の使用状況
 - ② 家族構成
 - ③ 職業
 - ④ 一日の生活スケジュール
 - ⑤ 手工芸品作成の経験について
 - ⑥ 1か月の食事に充てる金額
- これらの項目を、全 14 家庭を対象に質問した。



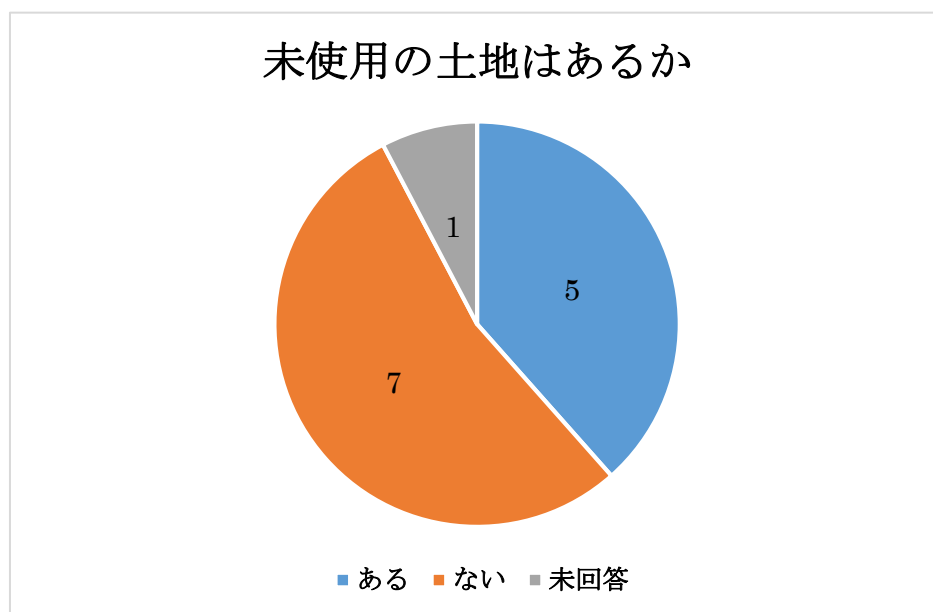
① 土地の使用状況

土地の使用状況を知るために具体的に土地の使い方と未使用の土地はあるかという2点を質問した。

<結果>

土地の使い方については、全家庭が農地と回答した。

私たちが調査を行ったのが雨季であったこともあり、どの家庭も土地は農業のために使用していた。主にトウモロコシの生産が行われており、ほかには米、粟、キュウリが挙げられた。次に、未使用の土地があるかという質問についての回答は以下のグラフのとおりである。

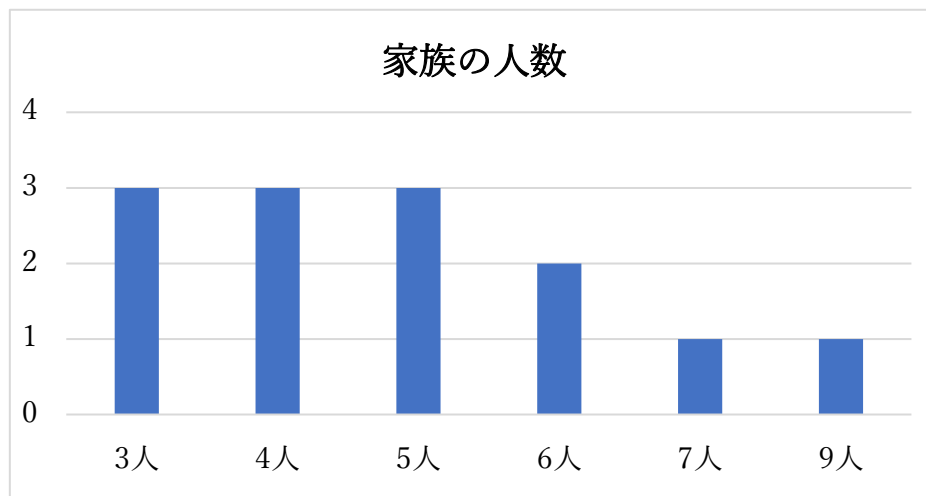


② 家族構成

家族構成を調査するとともに家庭の中で主な稼ぎ手と主な家事の担い手はだれかを調査した。

<結果>

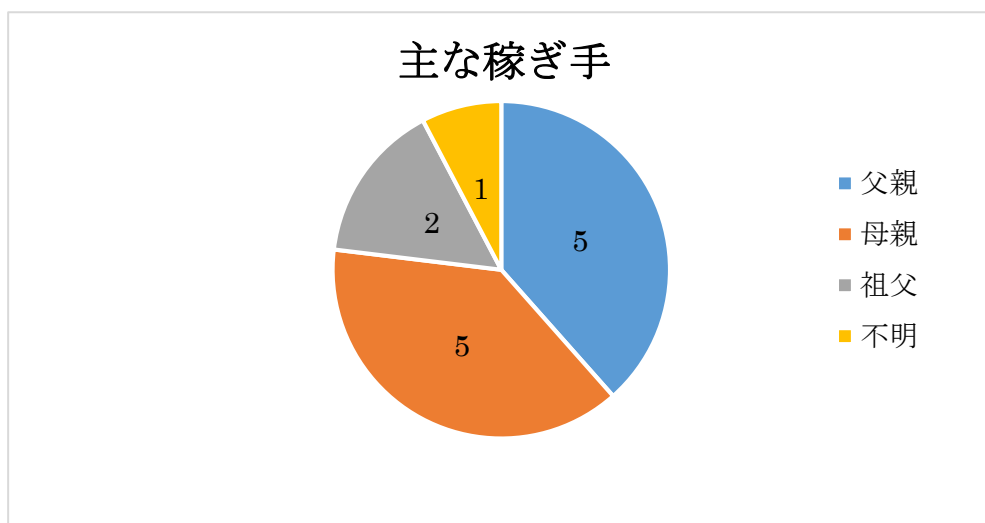
各世帯の人数を調査した結果が以下のグラフの通りである。



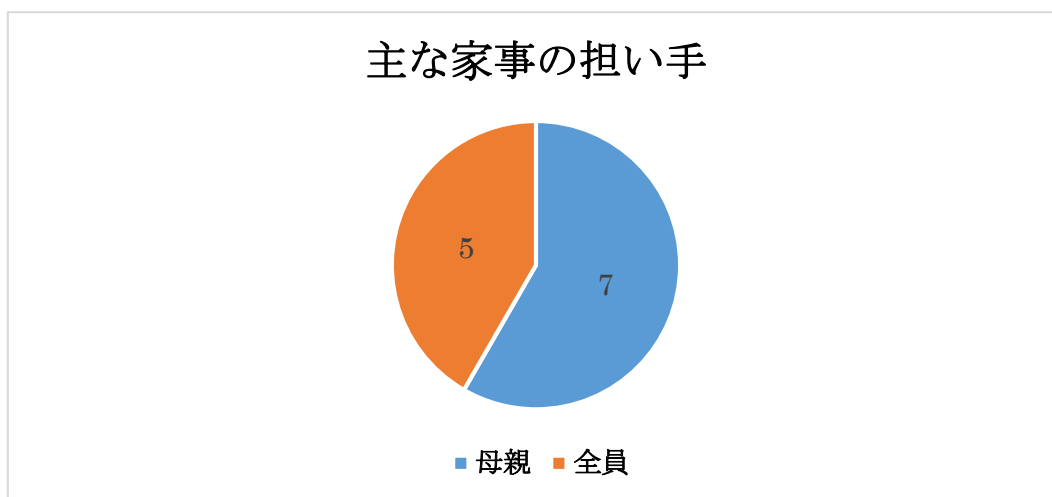
家族の人数が一番少ない家庭は3人、一番多い家庭は9人と大きく差が開いた結果となった。しかし出稼ぎなどの理由でその家で暮らしている実際の人数とは異なることもあった。



次に家庭の中での役割についてである。今回は主な稼ぎ手と家事の担い手について調査した。結果は以下の通りである。



男性が稼ぎ手となっている家庭が多い結果となった。女性が稼ぎ手となっている家庭の中には、男性が地震の被害によりなくなっている家庭もあった。次に主な家事の担い手である。結果は以下の通りだ。



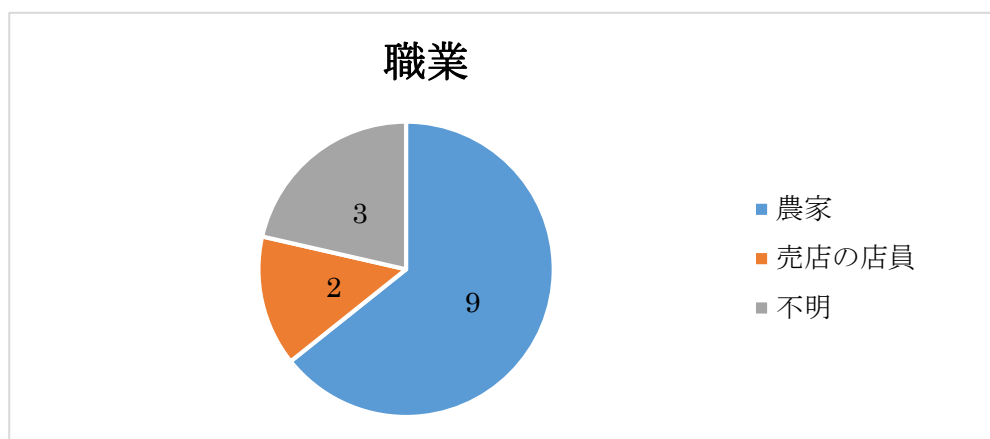
主な稼ぎ手の調査結果とは大きく違い母親か全員の二択という結果になった。男性が稼ぎ手となっている家庭が多いためか家事は女性が行っている家庭が多くみられた。

③ 職業

上の質問で調査した主な稼ぎ手の職業をその家庭の職業としてみなし、調査・集計を行った。

<結果>

調査を行った家庭の多くが農家と回答した。土地の使い方で農業と答えた家庭が100%だったこともこの調査結果と関係がありそうだ。なお、男性と女性において職種の偏りはなかった。



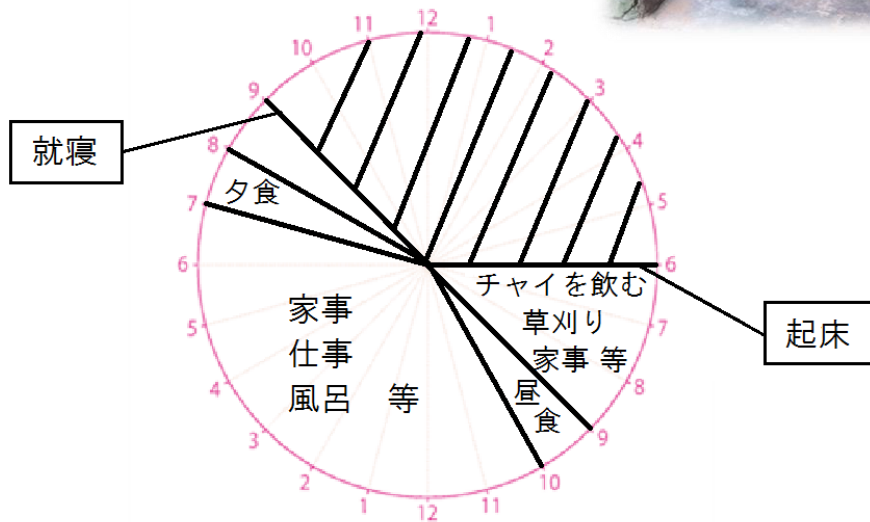
④ 生活スケジュール

1日の村人のスケジュールを知ること、今後のプロジェクトやワークの活動に参加してくれそうな時間帯を把握することや、村人との交流を行える時間帯の把握につながると考え、調査を行った。

<結果>

1日の生活スケジュールを調査した結果多少の時間帯の違いはあったが一日の流れはどの家庭も同じであった。下記の図は村の家庭のスケジュールを平均して1日の流れを作成したものである。

村の家庭では食事は一日に2回とられていた。一度目の食事は上の図に昼食と記してあるが朝食を兼ねた昼食であるといえるだろう。また、日が暮れてからは活動が行いにくいいため日が暮れる前の時間に家事や仕事を終わらせる傾向がある。また、共同の水場が外にあり、そこでシャワーをするため、日中の暖かいうちに風呂を済ませる家庭が多かった。



上の図は主に質問に答えてくれたその家庭での母親や父親の立場である人々の生活スケジュールであり、子供（主に学生）は少し違った生活スケジュールになっている。学校は2部制になっており、朝から午前中にかけて日本でいう中高生の年代の学生たちが学校で授業を受け、その後に小学生の年代の学生たちが学校で授業を受けていた。

中高生の年代の学生たちは学校が終わってからは家の手伝いをしている人が多かったように感じられた。

これらのことからプロジェクトやワークに参加してくれそうな時間帯は10時から19時までの時間ではないかと考えた。今回の調査で各家庭を周る際にも感じたことだが起床してから食事までの時間は身支度や、食事の準備で手が空いている時間が少なかった。また、この時間帯は10代の若者は学校へ行っていたため学生たちの参加も期待できないだろう。



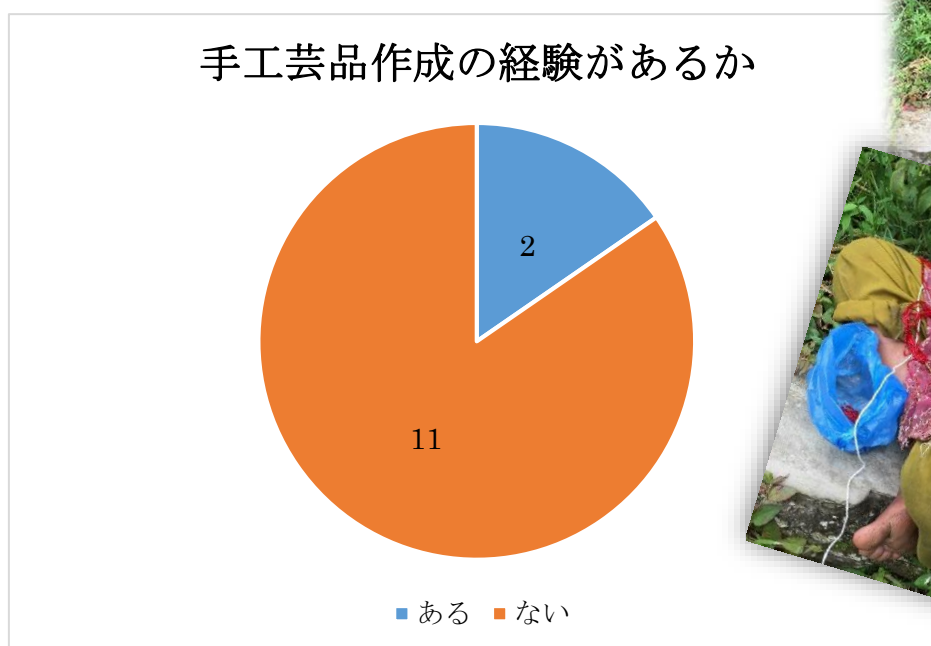
そのため、昼食後から夕食までの時間に村人たちを募って活動を行うことが良いと考える。

⑤ 手工芸品作成の経験について

私たちはプロジェクトにおいて村人と一緒に何か手工芸品を作りたいという思いがあるため、村人はどれだけの割合で手工芸品作成の経験があるかを調査した。

<結果>

手工芸品作成の経験の有無の割合は以下のグラフの通りである。



13 家庭中手工芸品作成の経験があると答えた家庭は 2 件のみであった。しかし、経験がないと答えた家庭の中でも、教えてもらえれば作ることができると思うと回答した家庭もあった。

経験があると答えた家庭に主にどのようなものを作ったことがあるのかを尋ねたところ木製品（ドアや窓など）、竹製品（かごなど）、フェルト製品（帽子や靴下など）、ビーズ製品（ネックレスなど）が挙げられた。



← 〈竹でできた籠〉

日本で売られていたフェルト製品
(ネパールでも同様のものが売られていた)→



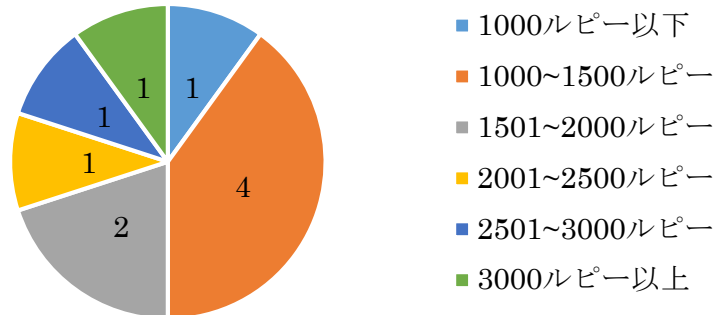
⑥ 1 か月の食事に充てる金額

自給自足率がどのくらいか調査を行うために、私たちは 1 か月で食費に充てる金額がどの程度かを調査した。

<結果>

6000 ルピーと答えた家庭が 4 件、8000 ルピーと答えた家庭が 1 件、9000 ルピーと答えた家庭が 2 件、10000 ルピーと答えた家庭が 1 件、15000 ルピーと答えた家庭が 2 件、未回答が 1 件であった。それぞれの家庭において家族の人数が異なるため、未回答の 1 件を除いた 12 家庭の結果をもとに一人当たりの食費を計算しまとめたものが下に記したグラフである。

1か月の一人当たりの食費



1 ルピー=0.9 円 (2018 年 10 月現在)

一番低い金額が約 670 ルピー、一番高い金額が約 3800 ルピーという結果になった。このように大きな差が生まれる理由の一つには農作物の種類が関係していた。村の人々は主食として多くの家庭が米を食べているが、米は高価であり食費を高くしている原因である。そのため米を生産している家庭では米を購入する必要がないため食費が低くなるという結果が出た。

● 考察・まとめ

生活状況を調査したことにより、ワークやプロジェクトに参加してもらいやすい時間を把握することができた。村人の生活状況を理解した上で、時間帯や人手を考慮して協力を募れば、もっと村人にとって協力しやすいものになると考える。

プロジェクトの内容については、調査を通して、生活に必要なドアや窓、農作業で用いるかご、そして、帽子や靴下といった衣服を手作りしている家庭があることがわかった。また、多くのネパール人女性が身に着けているネックレスなどのビーズ製品を作っている女性もいた。ワークのソフト面を補填する形でプロジェクトを行っていくためには、ワークの資金調達に関して村人たちに協力を仰ぐことになった場合、村人が作ること



ができる手芸品を利用できるのではないかと考える。村人が実際に付けているアクセサリーや帽子などネパールらしいデザインであり、ネパールの観光地や日本でも売ってあるようなデザインもあることから、日本でもネパールで作った手工芸品を販売することも実現可能なのではないかと思った。

キャンプ中に行ったイベントの中で、実際に村人たちとミサंगाを作った。その時の様子から、プロジェクトで手工芸品を村人たちに作ってもらい販売することができるかを検討したところ、製品の品質を考慮すると販売することは難しいと考えた。しかし、村のお母さんたちや若い女性たちを中心に、ミサंगा作りに対して興味を示し積極的に作ろうとしてくれた人や器用な人が多く簡単な説明で作ってくれたりデザインを変えたりしていた人がいた。このことから、村人たちに趣旨を説明し販売に対する理解を得たり、試行錯誤を重ねたりすることができれば、販売できる手工芸品を作ることができるのではないかと思った。また、これから実際に作っていく手工芸品を決めるときには村人自身のアレンジや意見を取り入れたものを作っていきたいと考える。理由は、日本製とは異なったネパール製の雰囲気を出せること、そして、村人とともに製品開発を行うことで主体的に取り組みたいと思えるきっかけにしたいからである。

今回のキャンプでは日常生活やイベントで大人の女性たちと交流する場面があったが、私たちが考えているプロジェクトのことや、春にこの村人を中心に手工芸品を作ってもらって販売し、少しでもその利益をグンバの建設の費用として用いたいと考えていることを全く伝えていなかったため、伝えておくべきだ



ったという反省があった。村人たちが理解していないままプロジェクトを始めると一時的なものになってしまうと考えるため、趣旨を上手く伝え、村人の意思で手伝ってもらえるようにしたい。そして、グンバが完成して自分たちが村での支援を終えることになった後も、グンバの管理を村人たちが引き継ぎ、村内で役割や資金が循環していけるようなプロジェクトをしていきたい。

6. イベント報告

8月25日(土)「日本食パーティー」

プログラム

- ①ジェスチャーゲーム
- ②日本食パーティー
- ③ミサンガのワークショップ



①ジェスチャーゲーム

食事の前に手巻き寿司パーティーの準備が完了するまで用意していたジェスチャーゲームを子供たちと行った。シャイな子供たちが多くジェスチャーが上手くできないこともあったが、楽しそうにゲームをしてくれた。事前に絵とネパール語と英語を書いた紙を用意し、それを用いてゲームを行った。



②日本食パーティー

村の人々に手巻き寿司と味噌汁を振る舞った。手巻き寿司の米は現地で購入した米を炊いてもらい、味噌汁の材料や手巻き寿司の具材などは日本で購入したものを使用した。手巻き寿司は日本で購入した缶詰を具材として用いた。子供たちはみんな列に並んでくれたため海苔を配ったり米や具材を乗せて、海苔を巻いたりする流れ作業でスムーズに行うことができた。味の好みは人それぞれでさまざまな反応を見ることができた



③ミサンガのワークショップ

日本食パーティーの後はミサンガ作りのワークショップを女性中心に行った。糸は現地で購入したものを使用した。ミサンガの作り方を教えながら行ったところ、とても楽しそうに作ってくれた。子供たちだけでなく村の大人達とも交流ができ、たくさん話をすることもできた。出来上がったミサンガを日本人とネパール人が交換して身につけている姿も多く見られ、笑顔が溢れる時間となった。



なお、この時間と並行して子供達には日本から持参した、しゃぼん玉を渡し一緒に遊んだ。しゃぼん玉はとても人気でシャボン液がなくなった後も石けんを水で溶かしてしゃぼん玉をしている子供達もいた。

● 総括

朝から雨が降っていたにも関わらず老若男女問わず多くの人が集まってくれた。これは事前にチラシを配って宣伝をしたり、前日にもう一度村を周ったりして広報活動に力を入れたことが効果的だった。

また、ワークの働き手となる人々とも親睦を深めることができたため春に繋げることができたと思う。

グンバの飾り付けは大変だったが、雰囲気が明るくなり、イベントを盛り上げるきっかけにもなった。

そして、ミサンガのワークショップはこれからプロジェクトを行っていく上で参考になるのではないかと思う。

集まってくれた人達はとても楽しそうにっていて、村の人たちとの親睦も深められたため今回のイベントは成功だと考える。

次回はより、男性にも楽しんでもらえるイベントを行いたい。

7. 各係からの報告

KP

村での朝の起床時間は、その日の予定によって前日のミーティングで決定し、だいたい 6 時 30 分から 7 時 30 分の間です。あらかじめシフトによって決められたその日の KP 2 人は、ほかのキャンパー達より約 30 分前に起床して、ホームステイ先のママが淹れてくれるお茶を運んだり、料理の手伝いをしたりします。ママが作ってくれるタルカリというネパール料理には、毎日たくさんの野菜が入っているので、料理の手伝いは主に野菜の下ごしらえです。日中、ほかのキャンパーが休憩したり、visit をしたりしている間に、洗濯とごみの焼却を行います。洗濯は村にある共同の水場で行い家の前に干すのですが、私たちがキャンプをした 8 月、ネパールはちょうど雨季だったので洗濯物がなかなか乾かなかったり、雨に濡れてしまったりすることがよくありました。共同の水場は、私たちが村を訪れた際、コケがびっしり生えており大変すべりやすい状態だったので、コケを除去する作業なども行いました。

キャンプ全体を通して、キャンパー全員が自分のシフトに責任をもって取り組むことができました。また、洗濯ものが多い際などは、手が空いているキャンパーが、進んでその日の KP の援助をする場面が多く見受けられました。次回のキャンプでも、その日の KP を中心にみんなで作業をする姿勢を大切にしていきたいです。

保健係

● 仕事内容

- ・海外保険の書類、保険カードの管理 ※1
- ・破傷風、A 型肝炎、日本脳炎の予防接種の推奨 ※2
- ・アレルギーや持病の把握
- ・保健バックの中身の確認、補充
- ・毎日キャンパーの健康チェックをする。
- ・怪我の手当て、病気の予防
- ・保健バックの管理

※1：海外保険は FIWC 九州の安全対策のルールとして、参加者全員が治療費用 2000 万円以上、その他傷害、過失、疾患等の保険内容に加入することになっている。

※2：これら 3 つの予防接種は FIWC 九州の安全管理の面から、接種することを特に推奨している。

- 総括

良かった点

- ・ 個人で薬やマスクを持ってきていたため不足するということがなかった。
- ・ 一人一人が安全マニュアルの事項をよく守っていたため、大きな病気、怪我に繋がらなかった。
- ・ 毎日健康チェックし、キャンパーの健康状態を把握することができた。
- ・ 保健バッグから使用した物、薬を記録できていた。
- ・ 一人一個ウエットティッシュを持ってきていたため、外出先でも必ず誰かは持っていた。

反省点と改善点

- ・ 外出する際に、虫除けスプレーをしっかりと足につけることができていなかったためヒルによく噛まれてしまった。
→徹底していた人は噛まれなかったそうなので次回は足まで必ずスプレーをするようにした。
- ・ 今回保健バッグが2つになり、1つが上にチャックがなかったため手荷物となってしまった。そのため、液体のものが、没収されてしまった。
→チャック付きのバッグを買い、手荷物にするときには注意する。
- ・ 外出する際に個人のバッグに絆創膏や消毒を入れていた。
→小さめの外出時のための保険バッグを準備し、別れて行動するときは必ず誰かは保健グッズを持つように徹底する。そのときにトイレットペーパーと黒い袋も携帯することを忘れないようにする。

会計係

- 支出

項目		金額(NR s)
宿泊費	銀杏旅館・カトマンズホテル費 ※1	72,895Rs
	村での滞在費	25,000Rs
食費	朝・昼・夕食費	80,500Rs
	水 ※2	910Rs
移動費		97,500Rs
通信費 ※3		7,150Rs
医療費 ※4※5		1,715Rs
エンジニア代		6,000Rs
コーディネーター代		78,000Rs
合計		369,670Rs

- ※1：銀杏旅館には全員で一泊したが、体調不良者がでたため本人を含めた二人が一泊延長した。
- ※2：水は個人で買うこともしばしばあった。
- ※3：通信費は現地で購入した SIM カードおよびリチャージカード代である。
また、携帯電話についてはキャンパーが私的に持っていたスマートフォンを使用した。
- ※4：バルビシの病院は政府の病院で治療費がかからなかった。
- ※5：カトマンズでの病院で支払った医療費・診察代・薬代。

● 収入

生活費：400,000 円(キャンパー1 人につき 40,000 円)

● 総括

<反省点>

- ・ パネちゃんに、前払いをしてもらっていたこと。
- ・ 移動費を最後にまとめて支払ったことで、パネちゃんに負担をかけてしまった。

<改善点>

- ・ 移動費は必ず当日に支払う。

<良かった点>

- ・ 支出があった日は、毎回会計ミーティングをしていた。
- ・ 領収書をお店からもらえてしっかりそろえることができた。
- ・ 時系列ごとに整理できた。
- ・ お金を会計二人で分けて持っていたため一人が大金を持つことがなかった。

● 参加するにあたってかかる費用について

ここでは、キャンプに参加するにあたって、一個人がかかった費用の例を示す。

項目	金額(円)
キャンプ参加費 ※1	2,000 円
航空券代 ※2	70,000 円
生活費	40,000 円
土産代	5,000 円
合計	117,000 円

※1：FIWC 九州の規約に則り、キャンプに参加する度に¥2,000 を納める。

※2：往復分の手段。ルートは福岡→青島/上海浦東→北京/昆明→トリブバン

8. ネパールでの生活

【朝】

ネパールの朝は早く、村人は 4:00～5:00 に起床します。日が昇ってくると鶏、山羊、水牛などの家畜が元気に鳴きはじめ、キャンパーも寝袋からもぞもぞと這い出てきます。

朝の日課はママが淹れてくれるネパールのお茶、「チャイ」を飲むこと。ジンジャーが効いたあつあつのチャイで、心も体も温まります。



【昼】

村の大人たちは、田畑を耕したり、草を刈ったり、各々の仕事を始めます。キャンパーは、visit をしたり、春のワークキャンプに向けての準備をする合間に、お風呂に入ったり洗濯をしたりします。「え？昼間にお風呂に入るの？」と思いましたが？じつはそれしか方法がありません。お風呂といっても左の写真にあるように出てくるのは水ですので、夜に入ったら凍え死んでしまいますから…。この写真は共同の水場で、ここで洗濯も行います。



【夜】 19:00～20:00 頃になるとご飯を食べます。夜ごはんもダルバートタルリを食べて、キャンパーはミーティングを行って 21:00～22:00 頃には就寝します。雨季のネパールでは夜通し強い雨が降ることもしばしばでしたが、雨の音で寝れない！というようなキャンパーはおらず、みんな元気ないびきをかき、隣の人を蹴ったりよだれをたらしたりしながらすやすや眠りました。

9. その他の活動

(JICA・UN Habitat 訪問)

～JICA 訪問～

8月31日に独立行政法人国際協力機構 JICA のネパール事務所を訪問しました。様々なプロジェクトをネパール各地で行われていて、為になるお話をたくさん聞くことができました。長年ネパールに住んでいるからこそわかるネパールの現状を詳しく教えていただきました。2015年に発生したネパール大地震の際の体験談も聞くことができ、改めてネパールについて考え、学びました。また、私たち FIWC 九州の課題でもある安全対策マニュアルについての相談にもものっていただき、質問にも答えていただきました。私たち学生団体ができることを考えるためには様々な角度から物事を捉えて考えることが重要であると実感しました。JICA で教えていただいたことをしっかりと共有し、今後のワークキャンプに生かしていきます。この度は貴重なお時間をありがとうございました。

<質問と回答 一部抜粋>

- Q. ネパールと日本の建築基準には違いがあるが、兼ね合いはどのようにしているのか。
- A. 日本を参考にするなどして、ネパールの建築基準に足りないところを補う。近年発展しているインドを参考にすることもある。
- Q. 学生団体がインフラの整備などの大規模なワークをするのは身の丈に合っていないのではないのか。
- A. インフラの整備にも方法はたくさんある。学生団体のため資金の面では難しいかもしれないが自分の労働力を生かすなどの方法がある。
- Q. 建物を建てたあと、点検や調査、修繕は行なっているのか。
- A. JICA では1年の保証期間がある。また、現地で手に入る材料で造るなどして JICA が離れた後に自分たちで修繕できるような工夫をしている。

他にもたくさんの質問に答えていただきました、ありがとうございます。

～UN HABITAT NEPAL OFFICE 訪問～

UN HABITAT（国連ハビタット）とは国際連合人間居住計画という団体で“**For a better urban future**”を目標にしている。

世界各地で急速な都市化が進行している発展途上国において、都市部に生活する人々の居住問題が深刻化していることを課題とし、都市化や居住に関する様々な問題に取り組む国連機関である。

今回私たちは、国連ハビタットがネパールで行っている活動のなかで震災後の復興支援活動である学校の再建や、村と町のつながりを作るプログラム、水の衛生管理についてのプログラム、さらに村にトイレを建設するプログラムなどについて聞くことができた。国連ハビタットの方針として、「してあげるのではなく現地の人々を教育して活動の促進を図る」ということがあり、実際にトイレの建設の際に、資金の提供ではなく、作り方や作る必要性を教えて現地の人々が自ら作るよう促したというお話が聞けた。

また、福岡の方と協力して水をきれいにするプロジェクトを行ったお話を聞くこともできた。国連ハビタットでは **Water for Asian Cities program** や **Water&Sanitation** など水の問題に取り組んでいるプロジェクトが多くある。その中の一つとして水質改善の為の活動では福岡の方と協力して行ったそうだ。実際に使用した薬品を見せていただくこともできとても貴重な経験になった。

さらに、国連ハビタットで行われている活動のお話だけでなく、そのような活動を行っていく上での注意点や私たちの活動の改善点になるようなお話も聞くことができた。何をするのか何をできないのかを先に前もって伝えることが、村人と協力してプロジェクトを行っていく上で大切だということ。何かを作っ



たり金銭的な支援をしたりすることも大切だが、作る必要性や作り方を教えて本人たちに自発的に活動してもらうことのほうが、持続性があり良い活動になるというお話を聞いたことは、春のキャンプやこれからの活動に生かしていくべきことだと思った。

NEPAL CAMP

2018 SUMMER



大川峻右 西南学院大学経済学部 2年

寺田愛理 九州大学農学部 2年

洲崎祐也 西南学院大学人間科学部 2年

砥綿佳澄 西南学院大学外国語学部 2年

岡部真輝 西南学院大学外国語学部 2年

友松陽向 西南学院大学人間科学部 2年

大津恵理子 西南学院大学人間科学部 1年

田原優佳 西南学院大学外国語学部 1年

古賀優大 西南学院大学国際文化学部 1年

北川真衣 九州大学経済学部 1年

FIWC 九州(代表:田中ゆう)

Mail: fiwcq@hotmail.com

Web: <http://fiwckyushu.jimdo.com>

(FIWC 九州公式ホームページ)

Twitter: @fiwckyushu

Instagram: @fiwckyushu

